

「的には社会的なアピールにもなる。この場をその機会として生かしてほしい」と説明した。

窪寺俊之・聖学院大教授が「宗教家と臨床宗教師」と題して講演。誕生の背景やケアの方法、宗教師が臨床宗教師になる意味といった視点から現状と課題を整理した。

「科学技術の進歩や経済発展では解決できない人間の深い悲しみや不条理な人生の問題に、臨床宗教師は向き合う役割を持ち、期待もされている。臨床の現場に向かい、宗教師として何を求められているのかを常に考えなければならぬ」と、宗教的ケアへのたゆまぬ歩みの必要性を語った。

臨床宗教師の実際のケアの現場での会話記録を基にした事例検討会や、地域ごとに参加者を振り分けたグループ内で自己紹介・活動紹介を行うといったワークショップなども開かれ、参加者の交流と研鑽が図られた。

同講座は、東日本震災の被災者の心のケアと公共空間での宗教者の活動への要望を契機として、2012年に生まれた。これまで4回の研修で57人の修了者が誕生し、各地に修了者を中心とした支部活動も起っている。4月から龍谷大でも、東北大と連携した養成講座が開かれる。

(佐藤慎太郎)

臨床宗教師らの ネットワークを

東京で研修
100人交流

東北大

諸団体の関係者ら約100人が参加。それぞれの現場での知恵や経験を共有しながら、宗教・宗派の垣根を越えた宗教師同士のネットワークを形成する機会となった。

地域で活動 助け合って

鈴木岩弓・東北大教授はあいさつで、同講座のこれまでの経緯とこれからの展望を話し、「誰もが自己の死を見つめざるを得ない超高齢化社会を迎える。臨床宗教師のよくな専門職が病院などケアの各現場に1人おり、要望に心えて死を見据え

東北大実践宗教学寄附講座は4、5日、東京都豊島区の大正大で臨床宗教師フォーアアップ研修を開催した。全国各地の臨床宗教師研修修了者をはじめとして、同様の趣旨で宗教者養成に関わる



臨床宗教師への期待を語る窪寺教授